

あきた芸術劇場「ミルハス」(秋田市)



六月、県民会館の跡地に新しい劇場が開館する。櫺の新緑に包まれた外観は、デビュー間際の凛々しい印象を漂わせていた。広小路からお堀越しに眺めると、屋根が特徴的な文化創造館（旧県立美術館）と調和して、新しい時代の景観になって親しまれていくであろう。

建築様式の特徴としては、二千席の大ホールと八百席の中ホールを、それぞれがV字柱で浮かせた躯体になっていて、外から入る音の影響を排除した構造になっているのだ。大ホールの内壁には、秋田杉の「木レンガ」という部材を用いて音響効果を高めているというが、アコースティック（電気的な増幅をしない音響）な音を聴いてみたい。

新しい劇場は未知の分野が多いので、五十七年の長い歴史となった県民会館を追想しながら、音楽との接点に触れていく。

それは高校生の頃、県民会館でオーケストラの演奏を初めて聴いて、弦楽器の奏でる音色に衝撃のような感動を受けたことであった。そして、小澤征爾が日本フィルハーモニーと秋田に来て、踊るようにタクトを振る姿に魅せられたのだ。高校に通った三年間、県民会館で行われたオーケストラの演奏は全て聴いたと思うが、チケット代に授業料まで使い込む羽目になっていた。

音楽好きの母の影響で、クラシックは幼い頃から耳にしていたが、本格的な鑑賞は高校時代からで、

若い感受性に良質な刺激を与えてくれた。その音楽空間を体感したのが、県民会館ホールなのだ。

その後、上京した時にサントリーホール、東京文化会館、東京オペラシティなどのコンサートに通ったが、どのホールも独創的な建築美や音響の質を競っていた。とりわけ、すみだトリフォニーホールには思い出が深い。このホールを練習、発表の拠点にしている新日本フィルハーモニーが、九月の「ミルハス」グラントオープンに招かれ演奏する予定になっている。

コンサートホールの個性は、指揮者と演奏する人たちが育て上げる。建築美や音響の質に加えて、聴衆の反応がひとつの要素になっていく。